

# 日仏語のオノマトペについて

—— とくに擬情語をめぐって ——

石 野 好 一

## 0. はじめに

本論において、日本語とフランス語のオノマトペを概観し、とくに擬情語と言われるものが、それぞれの言語においてどのような位置づけをもつかを考察する。それにより両言語のオノマトペの捉え方の違いを浮き彫りにしたい。

## 1. 日本語のオノマトペ<sup>1</sup>

本節において、いくつかの先行研究をもとに、日本語のオノマトペの主な特性についてまとめる。

### 1.1. 定義

日本語のオノマトペは、しばしば擬音語と擬態語が区別され、およそ次のように定義される。

#### 1.1.1. 擬音語

「外界の音を写した言葉を擬音語」(金田一春彦1978, p. 5) という。また、「これは、活字化できる音声連続および発音できる文字表記によって対象の音・声

---

<sup>1</sup> 本節および第2、3節は、石野好一(2006)「日本語のオノマトペ、特に擬情語について」(フランス語談話会2006年3月4日、於慶應大学)の発表、及びその報告Ishino(2006)をもとに、さらにデータを補強した。

を表現したもので、一定の形と意味をもち、一定グループの人々（多くは同国語人）の間で抽象的・普遍的に通用する」（飛田良文・浅田秀子2002, p. vii）。この厳密な定義によって、単なる音まねではないことがわかる。

### 1. 1. 2. 擬態語

他方、擬態語は「音を立てないものを、音によって象徴的に表す言葉」（金田一1978, p. 7）である。また「音のしないものを音がするように表わした言葉である」（金田一1988, p. 255）。より厳密には、「活字化できる音声連続および発音できる文字によって対象の様子を表現したもので、一定の形と意味をもち、一定のグループの人々の間で抽象的・普遍的に通用する」（飛田・浅田2002, pp. vii-viii）となる。

## 1. 2. 「一定の形」— 擬音語・擬態語の形態

日本語の擬音語・擬態語のほとんどは一般に次のようなかなり明確な形をもつ（金田一1978, pp. 14-17）。

- (1) 一拍語のもの：ふ（と） つ（と）
- (2) 一拍の語根＋「い」「ん」「っ」引く音のもの：おい（と） ぼん（と）  
かっ（と） にゃあ
- (3) 二拍の語根のもの：がば（と） びた（と） にゃお ぴよ
- (4) 一拍の語根＋「い」「う」「ん」「っ」のうちものが二箇：ごうん ぼ  
いん ぼうっ
- (5) 二拍の語根＋「っ」の形のもの：ごろっ（と） ばさっ（と） びたっ  
（と） ぼきっ（と）
- (6) 二拍の語根＋「ん」のもの：かちん（と） ときん（と） ぱたん  
（と） ぴよこん（と） ぽちゃん（と）
- (7) 二拍の語根＋「り」の形のもの：ぐるり（と） ごろり（と） つるり  
（と） ぴかり（と）
- (8) (7)の一種「り」でないもの。古風な語：うらら しとど そよる と

どろ

- (9) 二拍の語根の中間に、つめ、はねの入ったもの：むんず（と） さっさ  
（と） すっく（と）
- (10) (7)の形の第一拍と第二拍の間に、はねる音、つめる音の入ったもの：  
あんぐり あっさり すっかり
- (11) 二拍の語根の繰り返し、ことに第二音がラ行のものが多く：からから  
じりじり いそいそ くよくよ
- (12) 前項に似て類音のものを重ねるもの：あたふた かさこそ ちらほら  
つべこべ てきばき どぎまぎ
- (13) 全く似ていない二拍を重ねたもの：がたびし そそくさ（と） すたこ  
ら ちょこまか ぱちくり
- (14) 二拍語+「りん」「りっ」の形：くるりっ（と） ころりん
- (15) 五拍のもの： ころりんこ（と） けろりかん（と）
- (16) (7)(8)(9)の繰り返し：ぐでんぐでん ころりころり ごろんごろん の  
たりのたり ぱっかぱっか
- (17) (16)に似てあとのものは、多少形のちがうもの：しどろもどろ てんや  
わんや のらりくらり
- (18) その他の六拍のもの：こけこっこう すってんてん すっからかん  
つんつるてん とんちんかん

### 1.3. 意味からの分類

金田一（1978, pp. 5-9）と中村（2000, pp. 160-161）の分類法を参考に、次のように用語とその意味をまとめる。

#### (9) オノマトベの分類

- a. 擬音語 擬音語：物音をまねたもの「ドシン・パタパタ・リーン」  
擬声語：人や動物の声をまねたもの「オギャー・ワッハッ  
ハ・ニャーニャー」

- b. 擬態語 擬状語：無生物，ものの状態をあらわすもの「きらり・ざらざら・ぬめぬめ」  
擬容語：生物，人や動物の状態，動作をあらわすもの「うるうる・すいすい」  
擬情語：人間の心情をあらわすもの「いらいら・くよくよ・しんみり」

### 1.3.1. オノマトペの多義性と同音異義

しかし擬音語と擬態語との区別は必ずしも明確ではない。すなわち、  
－具体性（抽象度）によって解釈が異なる場合がある：

- (20) 「雨がザーザー降っているよ」（軒下→擬音語，山頂・建物の中→擬態語）（飛田・浅田2002, p. xi-xii）

軒下において実際に音が聞えれば擬音語だが，障害物のない山頂や，建物の中で外を見ている時など音が問題になっていないときは擬態語（降り具合）と考えられる。

－状況や場面によっていくつかの意味をもつものがある（Crystal, 1997, p. 176）：

- (21) a. ばらばら…強い雨（擬音語）。離散（擬態語）。  
b. ごろごろ…猫の鳴き声（擬音語）。固まりの不愉快な状態。余っている感じ。だらけた感じ（擬態語）。

このように，多義オノマトペや同音異義オノマトペがある。

### 1.3.2. 擬音語・擬態語の表記

しばしば擬音語はカタカナ，擬態語はひらがなで表記される。カタカナは実際の音声や音響を生でとらえた感じが出る。擬態語は直接に音を表すわけではないので，通常ひらがなで書く（中村2000, p. 160, p. 161）。

擬音語がカタカナなのはなぜか。これは昭和二十五（1950）年の国語審議会『国語問題要領』で「カタカナは外来語や外国の固有名詞に，あるいは擬声語などに用いられる」とされたことと関係が深いという（井上ひさし1990『日本語相談二』pp. 175-178）<sup>2</sup>。

## 1. 4. 日本語のオノマトベの特徴

### 1. 4. 1. 数が多い<sup>3</sup>

世界で最もオノマトベを多く持つのは朝鮮語で、おそらく1万語以上ある(野間秀樹1998, p. 31)<sup>4</sup>。それほどではないが、日本語にも見出し語4500語という辞典がある<sup>5</sup>。

擬音語(擬声語)はどここの国の言葉にもあり(井上1990, p. 177)、その数も多い。その中でも日本語は多く、Crystal (1997, p. 176)によれば、英語の3倍もの擬音語表現があるという。

また日本語には擬態語が多く、2500語くらい(大野1989, p. 200)とも言われている。

擬態語は外国語ではあまり見られない。フランス語には擬態語は一つもないという(金田一1988, p. 255)。フランス語については第4節で詳述する。

井上(1990, p. 177)は、英語にはzig-zag(ジグザグ)、nurlly-burlly(てんやわんや)、swish(サツという速い動き)、spin span(くるくる回るさま)ぐらいしかないと書いている。しかし、パルバース(2002, pp. 123-137)は、英語にも結構あるという。次はその一例である。

(2) hanky-panky (いんちき, ごまかし, いかがわしいこと)

<sup>2</sup> ただし、これは必ずしも徹底されていない。本論でも以下、原則として引用文献の表記に従い、統一はしていない。

<sup>3</sup> 数は、オノマトベの定義にもより、また秋田(2012, p. 66)も指摘するように、「カラカラ」と「カランカラン」を2語とするか1語とするかによっても異なる。ここではそれには深く立ち入らずに論じておく。

<sup>4</sup> 野間によると、『朝鮮語擬声擬態語分類辞典』(延辺人民出版社)には8286語、青山秀夫編『朝鮮語象徴語辞典』(大学害林)には約8800語が収録されている。もちろん辞書に収録されていない単語も非常に多く、実際に用いられるオノマトベの総数は、頻度の極めて少ないものまで入れると一万語を越すかもしれないという。

<sup>5</sup> 小野編(2007)『擬音語・擬態語4500日本語オノマトベ辞典』4500語、飛田・浅田編(2002)『現代擬音語擬態語用法辞典』約2200語(見出し語1046語、同族語・関連語含む)。

なお、秋田(2017, p. 76)によると、バスク語には収録語数5000語のオノマトベ辞典があるという。ただしほとんどが音や動きに関するものである。他にもアフリカのニジェール・コンゴ語族の言語に5000語前後あるものもあるという(同p. 67)。その表によると、日本語は2000語以上となっている。

weewee (おしっこ [を]する；おちんちん)  
riffraff (くだらない連中, 取るに足らない人々)  
namby-pamby (男らしくない, なよなよした, [文章など] いやな, 感傷的な, 甘ったるくてつまらない)  
dilly-dally ([決心がつかず] ぐずぐずする, 心がぐらぐらする)  
poo-poo (うんち；バカにする, 鼻であしらう [笑う], 軽蔑の態度を示す)

同じインド・ヨーロッパ語族でもヒンディー語には多いらしい (金田一1988, p. 255)。

アジアの言語には広く見られ, 朝鮮語は上述の通りだが, アイヌ語にも多い (大野晋1989, pp. 199-200)。中国語にはさまざまなオノマトベが揃っているが, あまり使わない (金田一1988, p. 255)。

擬情語は日本語に特徴的なオノマトベである。その数も100以上と少なくない。擬態語の一種だが, 感情, 心理の様子を表すオノマトベで, 欧米語にはあまり見られないと思われる (cf. 第4節)。

#### 1. 4. 2. 使用範囲が広い

日本語のオノマトベは, あらゆるジャンルに用いられる。これは擬音語についても言える。欧米ではしばしばオノマトベは幼児語に多く見られ, その使用は幼稚な印象を与える。それに対し, 日本語の擬音語・擬態語は用途が広くあって, たとえば, 「ハッキリ区別する」とか, 「シッカリした考え」とか, かたい文章にも使える (金田一1988, p. 256)。日本語でオノマトベの現れない種類の文章は, 商業文や法律関係の文ぐらい (泉邦寿1976, p. 121) だとの指摘もある。

文学作品にも活用されている (中村2000, p. 164-165)。

- (23) 「ざわざわきんきん, 調子を張ったいろんな声が筒抜けてくる」(幸田文『流れる』)  
「暗黒の空に稲光がびりびり裂け」(芝木好子『禁断の人』),  
「けらけら笑い転げて」(曾野綾子『永遠の前の一瞬』),

視覚表現「ストーヴの赤い火が、膝の下にチラチラと反映していた」(小林多喜二『蟹工船』),

「前足も後足もビローンと伸びきって」(群ようこ『ネコの住所録』)  
聴覚表現「ジュ、ジュクと雀の啼声(なきごえ)」(梶井基次郎『ある心の風景』)

嗅覚表現「紙おむつのざらついた匂いと、離乳食のどろどろした匂いが混ざり合ったような匂い」(小川洋子『ダイヴィング・プール』)<sup>6</sup>

触覚表現「真白な蛞蝓(なめくじ)のように、しとしとと濡れた肌」(川端康成『雪国』),

「乾燥すると肉が引張ってぴりぴり刺激する」(井伏鱒二『黒い雨』),  
「まわりの木に湯気を吸い取られてゆくから、ぱらっとした御飯になる」(庄野潤三『秋風と二人の男』)

抽象的表現「(感性なるものが)めらめらと漂ってくる」(宮本輝『二十歳』),

「どろりとした憎悪や擲掬」(林真理子『ウフフのお話』)(中村2000, p. 164-165)

さらに、日本語のオノマトペは、創作の自由度が高く、また細かいニュアンスを表すことができる(金田一)。

②4 コロコロ, コロリ, コロッ, コロリコロリ, コロンコロン, コロリンコ (金田一1988, p. 257)

しかし日本語のオノマトペにも使用範囲の制限がある。俳句では多用されるが、短歌からは敬遠される(小池清治2003, pp. 113-126)。すなわち、擬態語は情報量が極めて大きく、そのため、特に俳句のような短詩型では重宝がられ、また俗語を用いて雅の世界を構築しようとする俳句においては多用される(p. 113)。他方、雅語中心の和歌の世界では擬声語・擬態語はあまり好まれず、使用率が極めて低い(p. 119)。

<sup>6</sup> 日本語には「味・匂い・色」を表すオノマトペは厳密にはない(秋田2012, p. 73)という指摘もある(cf. 1. 4. 4)。

### 1.4.3. 音と意味関係（とくに擬態語）

擬音語はなるべく実際の音に似たような音を選んでるので音と意味(指示)の関係が深いことは言うまでもない。擬態語には音とその意味についてさまざまな指摘がある。

(A) /e/ 音が少ない（金田一1978, p. 19）

eの音は擬態語にあまり使わず、使うとたいてい悪い意味になる。それはeという母音が日本語の歴史の中で、新しく登場した母音であったという事情と関係があるらしい（大野晋1989, pp. 199-202）。

(25) でれでれ, でろり, めろめろ, げろげろ, へらへら, へとへと, へべれけ

(B) /i/ 音 vs /a o/音

iの音は小さいこと、運動が速いことを表し、a, oの音はこれに対立する傾向がある。キリキリとコロコロの対照などにその違いが見られる（金田一1978, p. 19）<sup>7</sup>。

(C) 濁音 /gzdb/ vs 清音

g, z, d, bのような濁音は、鈍いもの、重いもの、大きいもの、汚いものを表し、一方、清音は、鋭いもの、軽いもの、小さいもの、美しいものを表す（大野1989, pp. 199-202）。泉（1976, p. 130-131）も濁音は不快な音、動作・有様にマイナスの意味をもちやすく、それは特に擬態語に著しいと指摘する。

(26) サラサラ／ザラザラ, シットリ／ジットリ, ベッターリ／ベッターリ, ペラペラ／ペラペラ, キラキラ／ギラギラ, コロコロ／ゴロゴロ（大野）（泉）

(D) /h/ vs /p/

hは、より文章語的で品がいい感じがあるのに対し、pは俗語的で品が落ちる。

---

<sup>7</sup> /i/音が「小ささ」を表す語にしばしば用いられていることは、かなり前から欧米でも指摘されている。

(27) はらはら／ばらばら, ひらひら／ぴらぴら, ほろほろ／ぼろぼろ

(E) 拗音 vs 直音

拗音も, 一般に, 直音に対して俗語的で品が欠ける (金田一1978, p. 20)。

(28) チャラチャラ, シャラジャラ／サラサラ, ジャラジャラ／ザラザラ

(F) 一般の子音

k, tは堅いことを表し, sは摩擦感のあることを, rは粘って滑らかなこと, h, pは抵抗感のないことを, mはやわらかいことを表す。rは流動を表すが, 同時に他の形態素と組み合わせられて, 種々の状態を表し, 擬音語・擬態語では重要な役を帯びる (金田一1978, p. 20)。

(G) r音始まりは少ない

「ロリロリト」はキリシタンのつくった『日葡辞書』に見られるが, 恐怖のため落ち着かず, うろたえるさまで, どこか鬼気迫る感じを伝える言葉だが, 現代では使わなくなった (大野1989, pp. 199-202)。

(A)(D)(E)(G)は日本語の歴史と関わりがあり, 日本語固有の特徴と言えるかもしれない。それに対し, (B)(C)(F)は言語一般に言える音象徴の問題と関わりが深いように見える (cf. 第4節)。

#### 1. 4. 4. 意味的分布

金田一 (1978, pp. 17-18) は次のように指摘する。

－擬音語

欧米の言語では, (オノマトベによって) 家畜の鳴き声を詳しく聞き分ける (第4節参照)。日本語は, 野鳥のさえずりと昆虫の鳴き声の擬音語を豊富にもつ。

－擬態語

日本語には触覚関係のものが著しく多い。

(29) ザラザラ, ツルツル, ネバネバ, ベトベトなど湿気との関係で用いられるものが多い。

また, 人の種々の態度を表し分けるものが多い。

(30) キョロキョロ, ソワソワ, ポンヤリ, ムツツリ

他方、匂いを表すものが乏しい（第1.4.2節）。しいて挙げれば「ぷんぷん」「つんと」などがある。

味覚に関する擬態語も乏しい。甘さや辛さを擬態語で言い分けることをしない。ソリソリ、ニチャニチャ、モソモソ、ホコホコなどは味覚を表すのではなく、口の中に感じる触覚のちがいを表している<sup>8</sup>。

擬情語では、イソイソ、ソワソワ、イライラ、ヤキモキなど落ち着かない心理を表すものに集中しているというが、これについては後述する（第2節）。

## 1.5. オノマトペ（とくに擬態語）の用法

### 1.5.1. 歴史

大野（1989, pp. 199-202）によれば：

- 奈良時代は、「(舟が) ユクラユクラニ (進む)」のように、ニで終わるものが多く、「…ラニ」、「…ロニ」の形が目立つ。
- 平安時代になると、ニの代わりにトが広まる。「ホガラホガラト（夜があける）、ソヨロト（鳴る）」のように、「…ラト」、「…ロト」の形になる。他にも「ソソト（咲く）」、「ヨヨト（泣く）」などのパターンがある。
- 室町時代になって、「アッサリト、サッパリト、ホンノリト、ダンブリト」というように、「リト」の型に統一され、それと並行して「ウツトリ」のような「つまる音」、「ドンダリ」のような「はねる音」が用いられるようになった。

### 1.5.2. 文法

擬音語では副詞的という印象が強い。

日本語では「と」が指標となる。それに対し、英語ではしばしば動詞で表さ

<sup>8</sup> 朝日新聞2015年2月28日付の調査によると、「おいしさを感じさせるオノマトペ」1位はホクホク、以下、こんがり、さくさく、もちもち、ホカホカ、じゅわー、シャキシヤキ、とろとろ、もっちり、プリプリ、こってり、ふっくら、あっさり、ふわふわ、コトコト、じゅうじゅう、さっぱり、つるつる、シャキッ、と続く。いずれも口の中の触覚、見た目などの表現である。「農研機構・食品総合研究所の主任研究員、早川文代さんによると、食品関係者を対象にした調査では、日本語で食感を表す用語は全部で445語とされており、7割がオノマトペだという。」と記事にある。

れる。

㉑) wanwan to naku. / The dog is barking. (Crystal, 1997, p. 176)

副詞で泣いたり笑ったりする日本語、動詞で…する英語 (小池1994, p. 155) という指摘もある。

㉒) a. ワーワーと泣く / cry (howl, weep, shimper, mewl)

b. ハハハと笑う / laugh (smile, simper, giggle, grin) (小池, 同上)

しかし、オノマトベそのもの、とくに擬態語を見ると、形容詞の一種と考えるべき面もある (金田一1978, p. 21-23)。例えば、次の例のように、形容詞がアクセントで連用的用法と連体的用法を区別するように、オノマトベもそれに対応しているものがある。

㉓) a. シ\ロク (連用形)                      シ/ロ\イ (連体形)

b. ツ\ルツルよく滑る (連用的)    ツ/ルツルな (連体的)

これはアクセントによる一種の活用だと考えられる。

こう考えると、「てきぱき」なども、連用形だけをもった形容動詞、一種の形容詞と見る方がよい。

また、秋田 (2017, p. 77) は、「聴覚的なオノマトベは副詞用法を好み、反対に、高いレベルに位置する抽象的な意味のオノマトベは動詞・形容詞用法を好む」と指摘している。

「動詞や形容詞は、文の主役である述語として働くことができるが、副詞は述語を修飾する脇役的存在である。」聴覚的なオノマトベが「副詞の実現を好むのは、こうした付随的特性が、副詞という品詞の「脇役らしさ」と相性がよいため」であり、「反対に、高いレベルに位置づけられる視覚的なできごとや内的感覚は、それ自体が関心事となりやすく、二次的なとらえ方がそぐわない」(同, p. 80)。

### 1.5.3. 動詞 (語彙) 化

オノマトベを動詞にする方法がいくつかある。

### 1.5.3.1. 「～つく」「～めく」

オノマトペの要素に「つく」や「めく」などの接辞がついて動詞となっているものがかなり多いことはよく知られている。いずれも自発的な意味の動詞を作る。ただし、「～つく」による動詞は語感の悪いものが多い(泉1976, pp. 136-137. 例も)。

- ㉔ a. キラ (キラ) → きらめく, ユラ (ユラ) → ゆらめく  
b. グラ (グラ) → ぐらつく, ウロ (ウロ) → うろつく,  
ガタ (ガタ) → がたつく, グズ (グズ) → ぐずつく

したがって、一般にもとのオノマトペのもつ語感によって、「めく」と「つく」の選択に傾向が見られる<sup>9</sup>。

- ㉕ a. キラキラ → きらめく / <sup>?</sup>きらつく ハタハタ → はためく / <sup>\*</sup>はたつく  
b. ギラギラ → ぎらつく / <sup>\*</sup>ぎらめく バタバタ → ばたつく / <sup>\*</sup>ばためく

ただし、「めく」「つく」の両方の形をとるものがある。

- ㉖ ザワ (ザワ) → 「ざわめく」「ざわつく」  
ヨロ (ヨロ) → 「よろめく」「よろつく」

その他の動詞化の方法については、あまり言及がない。

### 1.5.3.2. 「～る」

「～る」は少ない。擬音語、擬態語(擬状語、擬容語)にはいくらか見られるが、擬情語にはあまり見られないように思える(→後述第2節)。

- ㉗ パくる ← ぱくぱく グズる ← ぐずぐず ポシやる ← ぽしゅん  
チビる ← ちびちび テカる ← てかてか

これらを見ると、語感の悪いものが多いように見える。

また、むしろ動詞からオノマトペができるほうが多いかもしれない。

- ㉘ かする → かすかす こねる → こねこね すける → すけすけ

<sup>9</sup> 語頭の\*は「言えない、存在しない」ことを表し、<sup>?</sup>は「受け入れにくい」ことを表す。

すべる → すべすべ  
 ねばる → ねばねば      のびる → のびのび、 のんびり  
 はれる → はればれ      ひえる → ひやひや      まぜる → まぜこぜ  
 ゆだる → うだる → うだうだ

### 1.5.3.3. 「～す」

㊦ ばらす ← ばらばら

### 1.5.3.4. 「～つく」「～めく」が好まれ、「～る」「～す」の動詞化が見られない理由

「～る」「～す」の動詞化があまり見られない理由として、これらの動詞語尾が積極的な行為を表す語尾であり、これはもともと日本語ではあまり好まれない表現パターンであるということが考えられる。

そもそも上述（金田一 cf. 第1.5.2節）のように、日本語のオノマトベは、状態や様子の表現として、形容詞的な性質が強い。そのため、状態の変化の意味をもつ自発的な「～つく」「～めく」の方が相性がよく、安定する。

## 2. 日本語の擬情語について

擬態語の中でとくに擬情語に焦点をあて、他の擬態語とは異なるその特性を考察する。

### 2.1. 定義

オノマトベのうち「心の中の様子を音で形容する語句」（金田一1988, p. 195）、「人間の心の状態を表すようなもの」を擬情語という（金田一1978, pp. 5-9）。これは擬態語の一種とされるもので、人間の心情をあらわす「いらいら・くよくよ・しんみり」（中村2000, pp. 160-161）などがそれにあたる。

泉（1976, p. 144）は「一般に日本語には心理状態を表す語が多いのはよく知

られているが、このことは擬態語についても言うことができる。(…) 擬情語は、ハラハラ、イライラ、(…) などいくらでも見つかるのである。擬情語が多いこと、これは日本語の語彙の一つの大きな特徴とすることができるだろう」という。

## 2.2. 擬情語の性質

### 2.2.1. 意味的分布

擬情語では、イソイソ、ソワソワ、イライラ、ヤキモキなど落ち着かない心理を表すものに集中しているという(金田一1978, p. 18)。実際、浅野『擬音語・擬態語辞典』(1978)に挙げられている項目を見ると、48例のうち31例が「落ち着かない心理」(●<sup>10</sup>)を表し、36例が「悪い意味」(■)を表しており、悪い意味をもつものも多いことがわかる<sup>11</sup>。

(39) 擬情語の用例 - 浅野『擬音語・擬態語辞典』(1978)より 全48例

擬情語とされているもの：

くさくさ                    ●■する

擬態語・擬情語とされているもの：

いそいそ                    ● する    している    と支度をはじめた    と向かった

いらいら                    ●■する    気味

うかうか                    ■する    してはられない    過ごす (と)車道に踏み出す    とは暮らせない

<sup>10</sup> リスト(39)において、「落ち着かない心理」を●で、「悪い意味」を■で示すこととする。「情」「態」「態・情」などの分類は辞典による。後につけた「する」などの動詞、補助動詞は用例を参考に本論の筆者がつけた。さらに加えて辞典の用例を挙げたものもある。

<sup>11</sup> ただし、反復形でないものには「のんびり、ゆったり、ほっと、ほっこり」など、落ち着いた心理を表すものも少なくない(Ishino, 2006, p. 115)。

うきうき	●	する	と心もはずみ
うずうず	●	する	
うっかり	■	する	口をすべらす と落とす
うっとり		する	眺める と聴きほれ
うんざり	■	する	だ
かっか	●■	する	／ (態) と照りつける
かりかり	●■	する	／ (態) に焼く (音) と食べる
ぎくっ (と)	●■	する	／ (態) なる (腰が)
ぎよっ (と)	●■	する	
くしゃくしゃ	●■	する	／ (態) にして笑う になる
くよくよ	●■	する	と悔やむ 気にする
げんなり	●■	する	肩を落とす
さばさば		する	
しんみり	■	する	語り合う
すっきり		する	と胸のつかえがおりる
そわそわ	●■	する	と見る 落ち着きがない
のんびり		する	と釣糸を垂れる
はっ (と)	●■	する	驚く われにかえる
はらはら	●■	する	／ (態) と散る
びくっ (と)	●■	する	／ (態) 動く
びくびく	●■	する	／ (態) 動かす
ひし (と)	■	心にこたえる	／ (態) 抱きしめる
ひやひや	●■	する	進む
ほっ (と)		する	胸をなでおろす 一息入れる
ぼんやり	■	する	見る 過ごす 暮らす ／ (態) かすむ
むかむか	●■	する	
むしゃくしゃ	●■	する	
むしゃむしゃ	●■	する	／ (態) 食べる

むずむず	●■する かゆい
むっ (と)	●■する
むらむら	●■ (する) と起こる・わく
やきもき	●■する
わくわく	● する と胸をおどらせる
わなわな	●■する

擬態語・(擬情語) とされているもの:

いじいじ	■する	した性格 した態度 と盗み見する
うじうじ	■する	
がっくり	■する (と) 首を垂れる	／ (態) 減る 倒れる・曲がる
きょとん (と)	■する	
すかっ (と)	する	／ (態) 晴れわたる
ほくほく	する (気持ち)	顔 ／ (態) する (かぼちゃ)

(擬情語)・擬態語とされているもの:

おずおず	●■する	差し出す と指さす
おたおた	●■する	
おちおち	●	してられない 眠れない
どきっ (と)	●■する	立ちすくむ ／ (態) (胸が) 鳴る

### 2.2.2. 擬情語の用法

(39)を見ると、「～(と)する」で動詞化するものが多いことに気づく。すでに述べたように、擬音語については具体的な動詞との共起の可能性が高い。そこで擬態語のみを対象としてさらに例を集め、それらを擬状語、擬容語および擬情語に分け、どのような動詞、補助動詞と共起するかを比較してみた。以下が

その結果である。

## 2.2.2.1. 統計

### 2.2.2.1.1. 擬状語

擬状語全209例中,

(補) 助動詞のみと共起するもの : 57例 (=27.3%)

具体的な動詞とも共起するもの : 152例 (=72.7%)

以下はその内訳である。

#### (40) 擬状語と(補)助動詞

「～(と)する」のみ可能 : 6例 (=2.9%)

ごたごた ごみごみ のっぺり はんなり ぴんぴん むしむし

「～(と・に)する・なる」のみ可能 : 3例 (=1.4%)

がらんと (腰が)ぎくっと※ くしゃくしゃ※<sup>12</sup>

「～(と・に)する・だ・なる」のみ可能 : 24例 (=11.5%)

あっさり(味) がたびし がっしり ぎざぎざ ぎとぎと くにかく  
にゃ くりくり(眼) ぎとぎと ざらざら しこしこ すべすべ だ  
ぶだぶ ちゃきちゃき ぬめぬめ ぬらぬら ねばねば ふかふか  
ぶかぶか ふにゃふにゃ ほくほく(かぼちゃ)※ まったり むち  
むち むっちり めちゃくちゃ

「～だ・(と・に)なる」のみ可能 : 19例 (=9.0%)

あつあつ ありきたり かすかす がびがび きんきらきん (一時  
間) こっさり しわしわ すれすれ そっくり だまだま ちよっき  
り びしょびしょ (10円)ほっきり ほやほや まちまち みえみえ  
めためた もじゃもじゃ もてもて

「～だ」のみ可能 : 5例 (=2.4%)

<sup>12</sup> ※印は他の解釈も可能。「ぎくっとする」→擬情語, 「くしゃくしゃする」→擬情語。以下同様。「ほくほくする(気持ち)」→擬情語。

かすかす かつかつ さまざま ばりばり (=新品) やまやま  
さまざまな動詞や形容詞などと組み合わせられるもの：152例 (=72.7%)  
ありありと (見える・わかる) あんぐり (開いた) うっすら (と)  
(かかる) うねうね (と) (続く) うらうらと (照る) がたがた (揺  
れる) がたと (揺れる) かちかちに (凍る) かつちり (合わさ  
る) からからに (乾く, 干上がる) がらがらに (すく) からっと  
(揚がる) からりと (晴れる) がらりと (変わる) かんかんに (照  
る) ぎっしり (と) (詰まる) ぎゅうぎゅう (押す) 他

## 2.2.2.1.2. 擬容語

擬容語全407例中,

(補) 助動詞のみと共起するもの：21例 (=5.2%)

具体的な動詞とも共起するもの：386例 (=94.8%)

### (4) 擬容語と(補)助動詞

「～(と)する」のみ可能：8例 (=2.0%)

いちゃいちゃ きよときよと くらくら しゃきつ しゃきしゃき  
ちゃらちゃら ハグハグ ぱちくり

「～(と・に)する・だ・なる」のみ可能：7例 (=1.7%)

がさがさ (性格) ぎすぎす (性格) きゃぴきゃぴ ほっそり ぼっ  
ちやり ぼやぼや まぜこぜ

「～だ・(と・に)なる」のみ可能：6例 (=1.5%)

かちかち ずんぐり(むっくり) なあなあ ぼいん むきむき とん  
ちんかん

さまざまな動詞と組み合わせられるもの：386例 (=94.8%)

あくせく (働く) あっさり (認める) うじゃうじゃ (集まる) うと  
うと (と) (眠る) うようよ (集まる) うろうろ (歩き回る) うろ  
ちよろ (歩き回る) えっちらおっちら (登る) えへらえへら (笑う)  
おいおい (始める) おっとり (かまえる) がくがく (震える) が  
しっと (受けとめる) がたがた (震える) がっしり (と) (受けとめ

る) がっぷり (組む) がっぽり (もうける) がぼと (跳ね起きる)  
 こてこて (塗る) ことこと (煮る) 他

### 2. 2. 2. 1. 3. 擬情語

擬情語全135例中,

(補) 助動詞のみと共起するもの: 85例 (=63.0%)

具体的な動詞とも共起するもの: 50例 (=37.0%)

#### (4) 擬情語と(補)助動詞

「～(と)する」のみ可能: 36例 (=26.7%)

いらいら うきうき うずうず うるうる おたおた おろおろ  
 がか かりかり きき(嬉々)と ぎすぎす くさくさ くしゃく  
 しゃ※<sup>13</sup> くらくら さっぱり さばさば じりじり せいせい つ  
 んつん どきとと とげとげ はとと はればれば びりびり ほろっ  
 と ほろりと まごまご まんじりと むかむか むかっつと むしゃ  
 くしゃ むしゃむしゃ むずむず むつと むらむら もやもや や  
 きもき

「～だ」のみ可能: 1例 (=0.7%)

やれやれ

「～だ・(と・に)なる」のみ可能: 16例 (=11.9%)

あつあつ(恋愛) いけいけ(気分) いっぱいいっぱい おせおせ  
 がちがち かちんかちん かんかん たくた しめしめ たじたじ  
 なあなあ のりのり へとへと へろへろ めろめろ ルンルン

「～(と)する・だ」のみ可能: 13例 (=9.6%)

うんざり がっかり (cf. がっくり↑) げっそり※<sup>14</sup> げんなり でれ  
 でれ どきどき どっきり はらはら びくびく びっくり ひやひ  
 や ぶりぶり わくわく

<sup>13</sup> (顔・紙)「くしゃくしゃにする・になる」→擬状語。

<sup>14</sup> 「げっそり痩せる」→擬容語, 「ほくほくする(かほちゃ)」→擬状語。「(腰が)ぎくつとなる」→擬状語, 「どきとと(胸が)鳴る」→擬容語。

「～(と・に)する・だ・なる」のみ可能：3例(=2.2%)

あっぷあっぷ きゅうきゅう ほくほく※

「～(と・に)する・なる」のみ可能：6例(=4.4%)

ぎくっ※ ぎよっ きよんとと しゃっきり すかっ どきと※

「～(と・に)する・くる・なる」のみ可能：8例(=5.9%)

うっ かっと じ(一)ん しっくり ぞくぞく びくっ むかっと  
むっと

「～(と・に)なる」のみ可能：2例(=1.5%)

がーん ぐっ(となる・くる)

さまざまな動詞と組み合わせられるもの：50例(=37.0%)

あたふた(と出かける) (いけ)しゃあしゃあと(反論する) いじい  
じ(と引きこもる) いそいそ(外出する) うかうか(と過ごす・誘  
い出される) うじうじ(と引き下がる) うっかり(忘れる) うつつ  
つ(と過ごす) うっとり(見とれる) うはうは(喜ぶ) おそろおそ  
る(窺う) おっかなびっくり(試みる) おずおず(進み出る) おち  
おち(眠れない) おどおど(現れる) おめおめ(引き下がる)(=恥  
じ入ることなく) おやっ(と)と(気づく) おやおやと(あきれる) がつ  
がつ(勉強する) かんかん(に怒る) ぎゃふんと(言わせる) ぐっ  
たり(しなだれる) くよくよ(考える) けちけち(と出し惜しむ)  
こせこせ(動き回る) こそこそ(隠れる) こわごわ(触る) しぶし  
ぶ(承知する) しゃあしゃあと(言い訳する) しょんぼり(うつむ  
く) しんみり(語る) すごすご(帰る) すっきり(目覚める) せ  
かせか(歩く) せこせこ(と探し回る) そわそわ(と出かける) の  
びのび(暮らす) のほほんと(過ごす) のんびり(過ごす) のんべ  
んだらり(と)と(過ごす) ぷりぷり(怒る) ほとと(一息つく) ぼーっ  
と(眺める) ほのほの(語る) ほんやり(やり過ごす) むらむら  
(とわく) もじもじ(とうつむく) もんもん(と)(悩む) わくわく  
(と胸おどる) わなわな(とおびえる)

## 2. 2. 2. 2. 統計の結果

	擬状語	擬容語	擬情語	計
+ (補) 助動詞のみ	57 (27.3%)	21 (5.2%)	85 (63.0%)	163 (21.7%)
+ 具体的な動詞とも	152 (72.7%)	386 (94.8%)	50 (37.0%)	588 (78.3%)
計	209	407	135	751

## 2. 2. 2. 3. 擬情語の用法のまとめ

## 2. 2. 2. 3. 1. 「～(と)する」

以上を見ると、あきらかに擬情語は補助動詞「～(と)する」のみで動詞化するものが多い<sup>15</sup>。

- (43) いらいらする    うかうかしてはられない    うんざりする  
       ときどきする

これは、感情を表す動詞が少ないためだと考えられる。

そのため、多義的なオノマトベについては、「～する」をつけるると擬態語・擬情語の意味になりやすい。

- (44) a. バタバタ鳴らす (擬音語) → ばたばたする (擬容語, 擬情語) 「落ち着かない」  
       b. カリカリとかじる (擬音語) → かりかりする (擬情語) 「神経質になる」

逆に、擬情語に具体的な動詞をつけると擬態語 (擬状語・擬容語)・擬音語になってしまうものがある。

- (45) a. かっかする (擬情語) → かっかと燃える (擬状語)<sup>16</sup>  
       b. びくっとする (擬情語) → びくっと動く (擬容語)  
       c. かりかりする (擬情語) → かりかりに焼く (擬状語) かりかりと食べる (擬音語)

<sup>15</sup> 擬音語では少ない。「?鐘をカンカン(と)する」

<sup>16</sup> 「かっかと怒る」の用例が飛田・浅田にある。本論の筆者の語感では(?)である。

### 2.2.2.3.2. 「だ」

助動詞「だ」(または形容動詞活用語尾「だ」)との組み合わせも多い<sup>17</sup>。

(46) うんざりだ [な気分]    ときどきだ [な気分]

擬音語も、「～だ」をつけると擬態語・擬情語になりやすい。

(47) 椅子がガタガタ (と) 鳴る (擬音語)

→ 椅子がガタガタだ (擬態語 (擬状語))

姿勢 (気分) がガタガタだ (擬態語 (擬情語))

擬情語に具体的な主語や動詞をつけると擬態語 (擬状語・擬容語)・擬音語になってしまうものがある。

(48) (観客を前にして今私は) ガチガチだ (擬情語または擬態語)

→ 歯がガチガチだ (擬態語・擬音語)

歯がガチガチ鳴る (擬音語)

### 2.2.2.3.3. 「～(と・に)なる」

補助動詞「～(と・に)なる」で動詞化するものもある。

(49) うっとり (と) なる    ぎよっとなる    じ (一) んとなる    めろめろになる    ルンルンになる

「～(と・に)なる」は、状態の自発的变化・到達という意味をもつ。自発表現は日本語の好む表現パターンであるためか、このパターンは擬状語・擬容語でもよく見られる<sup>18</sup>。

(50) ちかちか (と) なる (擬状語)    こんがりとなる (擬状語)    ねっとりとなる (擬状語)

むきむきになる (擬容語)    とんちんかんになる (擬容語)

したがって擬音語に補助動詞「なる」をつけると、擬態語になることが見ら

---

<sup>17</sup> これについても擬音語では少ない。

\* 汽車が [は] シュッシュッポッポだ。\* 鐘が [は] カンカンだ cf. 彼女が [は] カンカンだ

<sup>18</sup> これは擬音語にはあまり見られない。

れる<sup>19</sup>。

- (51) ガタガタ鳴る → がたがたになる  
 カリカリと食べる → カリカリになる（食感）（神経）  
 ガリガリ削る → がりがりになる（感触）

#### 2.2.2.3.4. 「～（と）くる」

補助動詞「～（と）くる」で動詞化するものがある。

(52) しっくりくる　ぐっとくる　かちんとくる　がっくりくる  
 擬情語+「くる」を「いく」に換えると、擬状語、擬容語的な意味が強くなる傾向がある。

- (53) しっくりいく（ぴったり合う，うまきはまる）  
 ぐっといく（飲む様子）  
 かちんといく（縮まる，はまる様子）  
 がっくりいく（「死ぬ」などの意？）

これは、「くる」が自分のこととしてとらえていることを表すため内面的な表現、心理・感情表現になりやすいからと考えられる。それに対し、「いく」は他人事として、外界の「できごと」「状態」の意味が強調される。そのため擬情語以外では、「くる」とはあまり結びつかない。

逆に、擬状語、擬容語に「くる」をつけると、擬情語的な意味合いになる<sup>20</sup>。

- (54) しっぼりくる（なじむ感覚）　ちくちくくる（胸に痛みを感じる）  
 がくがくくる（恐怖を感じる）　ずっしりくる（重圧を感じる）  
 くらくらくる（心理的に動揺する） cf. くらくらする（めまい）  
 わなわなくる（恐怖を感じる） cf. わなわなする（震える）

他人事や外界のことがらが自分のことになるため、内面的な意味合いが強くなるのである。

<sup>19</sup> 「になる」の「に」は、助動詞「だ」の活用の一つであるため、上の「だ」の場合と同様の傾向がある。

がたがただ　カリカリだ　がりがりだ（いずれも擬態語となる）

<sup>20</sup> やや俗語的な感じがすることが多い。

### 2.2.2.3.5. 「～つく」「～めく」

「～つく」「～めく」では動詞を作りにくい<sup>21</sup>。

- (55) いそいそ → \*いそつく \*いそめく  
うかうか → \*うかつく \*うかめく  
うきうき → \*うきつく \*うきめく  
うずうず → \*うずつく \*うずめく  
くさくさ → \*くさつく \*くさめく

「～つく」は可能なものもあるが、「～めく」はほとんどない。

- (56) いらいら → いらつく \*いらめく  
がたがた → がたつく (「怖気づく」の意) \*がためく  
びくびく → びくつく \*びくめく  
まごまご → まごつく \*まごめく  
むかむか → むかつく \*むかめく  
そわそわ → そわつく \*そわめく  
びくびく → びくつく \*びくめく  
まごまご → まごつく \*まごめく

「～つく」による動詞化は語感の悪いものが多い (cf. 1.5.3.1.)。それと、擬情語に語感の悪いものが多いこと (cf. 2.2.1.) とは無関係ではない。

### 2.2.2.3.6. 「～る」「～す」

「～る」「～す」による動詞化はほとんど見られない<sup>22</sup>。

- (57) びくる ← びくびく  
\*いらる ← いらいら \*うずる (cf. うづく) ← うずうず  
\*じりる (cf. じれる) ← じりじり

<sup>21</sup> 一般の擬態語が「～つく」「～めく」動詞を比較的作りやすいのと好対照である。  
グズ (グズ) → ぐずつく (擬容語) キラ (キラ) → きらめく (擬状語)  
ユラ (ユラ) → ゆらめく (擬状語)

<sup>22</sup> 「くさる←くさくさ」が挙げられるかもしれない。ただし「くさる」は「腐る」から考えると、「くさくさ」とは無関係なところから結びつけられたのかもしれない。いずれにしてもこの例はほとんど見当たらない。

### 3. 日本語の擬情語について一まとめ

以上の考察から、日本語の擬情語の性質について、次のようなことが確認できよう。

1. 擬情語は心理・感情を状態として捉え、形容詞的に表現されている。これは日本語のオノマトペ、とくに擬態語の一般的な性質と矛盾しない。
2. 擬情語は感覚的にその印象を未分析の状態として表すことに重点が置かれている。そのため、それと共起できる具体的な動詞がないことが多く、動詞化するためには「する」などの補助動詞と結びつけることが多くなる。
3. 擬情語は内面的な意味やニュアンスを表すため、外観を示す文脈や外界に向かう表現とは相容れない。

### 4. フランス語のオノマトペ<sup>23</sup>

他方、フランス語のオノマトペは、どのようになっているのだろうか。

Enckelle & Rézeau (2003, p. 12) は、オノマトペ *onomatopée* を「人間や動物、自然、人工物の音を、分節された言語音によってまねている、またはまねているとされる語<sup>24</sup>」と定義している。

しかし、すでに見たように日本語では擬音語・擬態語、さらにそれらをもっと細かく分類するのに対し、フランス語ではそのような区別は行わない。以下では、日本語の分類法がフランス語でも対応できるのかを考察してみる。

それに対し、擬音語、擬態語(擬状語、擬容語)にはいくらか見られた(cf. 1.5.3.2. (36))  
<sup>23</sup> 第4節は、石野(2014)のオノマトペに関する考察部分をもとにしている。

<sup>24</sup> « un mot imitant ou prétendant imiter, par le langage articulé, un bruit (humain, animal, de la nature, d'un produit manufacturé, etc.) » (Enckelle & Rézeau, 2003, p. 12).

この定義は、擬態語などをカバーしていないが、最近、日本語ではむしろオノマトペという語を擬音語や擬態語などの総称として用いる傾向がある。

#### 4. 1. 擬音語・擬声語

オノマトペは、ヨーロッパ語では、ロマン語（ラテン系言語）よりもゲルマン語の方が多いという指摘もあるが<sup>25</sup>、フランス語にも多い。

##### 4. 1. 1. 擬音語

以下に、主に辞書に擬音語として載せられているもの（中でとくに無生物の音を示すもの）を列挙する<sup>26</sup>。

(58) badaboum	ばたん, どすん, ごろごろ (物が落ちて転がる音)
bang	どかん, ばん (爆発音)
bing [bi(ŋ) ]	ばん, びしっ (打撃・衝突)
boum	バーン, ドカーン; ドーン, ドシン, ゴーン (爆発音・落下音)
clac	ピシッ, ピシヤリ, パチン, カッカッ (鞭・平手打ち・馬のひづめなどの音)
claquement (m)	(ドアの閉まる) パタン; (鞭(むち)の) ピシッ; (拍手の) パチパチ; (歯の) カチカチ
clic, clic(-)clac	カチッ, カチリ, パチッ, ピシッ
couac [kwak] (m)	(吹奏楽器など) 調子はずれの音
cric	ポキッ, パリッ, メリメリ (物が折れたり破れたりする); カチッ (鍵を回す)

<sup>25</sup> 「どんな言語もオノマトペを包蔵している。ゲルマン語をロマン語と比べてみると、前者の方がその種類においても分量においても優るように思われる。(…)なぜならゲルマン語はロマン語よりも多くの子音をもって音節を構成し、したがって音節の種類が多様をきわめるのにたいし、ロマン語はラテン語いらいますます母音をふやし、そのけっか比較的少数の開音節しかもたないからである。」(小林英夫, 1965, p. 318) ただし、開音節の多い日本語にもオノマトペが多いことを考えると、数の多さは必ずしも音節の音構成だけの問題ではない。

<sup>26</sup> おもに辞書 P Roy の「擬音」の表示をもとに、それを筆者が擬音語、擬声語などに分類した。[ ]は発音を示す。名詞とされているものには男性名詞 (m), 女性名詞 (f) を記した。

cric(-)crac	ポキッ, バリッ, メリメリ (物が裂けたり折れたりする音); パッパッ (すばやい動作)
crincrin (m)	(安物のヴァイオリンの) キーキー
ding [di(ŋ)]	(鐘・ベルなどの) リーン
drelin-drelin	りんりん
dring [dri(ŋ)] (m)	(鈴, 特にベルの) リーン, ジリン
flac	ぴちゃ, ばしゃ。
flie flac (m)	ぴしぴし, ぴしゃぴしゃ (鞭(むち), 平手打ち); ひたひた (波); ぴしゃびしゃ (水たまりを歩く)。
floc (m)	ぴしゃ, ばしゃ (水)。
flop (m)	べしゃん, ばしゃん (柔かな物が落ちた時)
froufrou	サラサラ (布ずれ)
glouglou (m)	ごぼごぼ, どくどく (液体), くうくう (七面鳥・鳩など)
paf	どすん, ばたん; ばん, ぱちん, ぴしゃ (落ちる・たたくなど)
pan	ばん, ばん (撃つ・たたく・破裂する)
patapouf [pa-ta-puf]	どしん, ずしん (物の落ちる)
patatras	どすん, がちゃん (物の倒れる (落ちる))
pif [pif]	ぱちぱち, ばんばん (破裂・手で打つ)
pin-pon [pẽ-põ]	パンポン, ピーポー (消防車など)
plouf [pluf]	ぼん, ぼちゃん, ぴちゃ, ほとん (水, 柔らかな表面に落ちる音)
pouf [puf]	どすん, ばたん (鈍い落下音); どかん (破裂音)
rantanplan	= rataplan ドンドン (太鼓)
snif(f) [snif] (m)	くんくん, ふんふん (においをかぐ)
tac	カチャッ, カタッ (剣・機関銃などの乾いた音)
taratata	パッパラパー (らっば)
teuf-teuf [tœf-tœf] (m)	(エンジンの) ぱたぱた

tic(-)tac (m)	(機械・時計など) チクタク, こちこち, かちかち
toc, toc toc	トントン, コツコツ (ドアのノックなど。繰り返す)
	faire toc toc à la porte ドアをこつこつとノックする。
top	(短い断続的な) 信号; (ラジオなどの) 時報信号
vlan, v'lan	ぽかつ, ぴしゃ, ばたん (殴打・ドアの開閉など)
zinzin [zɛ̃ -zɛ̃] (m)	騒々しいもの

#### 4. 1. 2. 擬声語

人や動物など生物の声や鳴き声を表す擬声語として、次のようなものが辞書に挙げられている。

59 aïe [aj]	痛い, 痛っ
areu areu [a-rø-a-rø]	あぶあぶ, ばぶばぶ (赤ん坊)
atchoum [a-tʃum]	ハクション
brouhaha [bru-a-a] (m)	(群衆の) ざわめき, どよめき
brrr	ブルブル (寒さなど)
chuchoter	ささやく, 耳打ちする, ざわめく
chuintier	しゅうしゅう鳴らす, フクロウが鳴く
chut [ʃyt]	しっ, 静かに
couic [kwik]	キュッ, キー (締め殺される時の小動物や人の叫び声)
cri-cri, cricri [kri-kri] (m)	(コオロギ・セミなど) 鳴き声
hé	《呼びかけ・注意》おい, ねえ。《強調》Hé oui ! そうですね
hi, hi ! hi !	ひっひっ, ひいひい (泣き声・笑い声)
hi-han [i-ã]	いおおん (ロバの鳴き声)
jaser	うわさする; 悪口を言う, [鳥] さえずる; [幼児] 片言をしゃべる; [小川など] せせらぐ, ((古))

	ぺちやくちゃしゃべる
na	ねえ, ほら, やーい;…だつてば, …だぞ (断定・否定を強調)
ouïe, ouille [uj]	うっ, いてて: (痛み)
oust(e) [ust]	そら, それ, さあさあ (人を追い出す時・促す時)
patati, patata	ぺちやくちゃ (おしゃべり)
peuh [pø]	ふん, へっ, ふうん, へえ (軽蔑・無関心など)
pff(t) [pf(-t)], pfut [pfyt]	ふん, へっ (軽蔑・無関心)
pioupiou (m)	((話・古)) 若い兵士, 兵卒, 兵隊
psitt [psit], pst [pst]	ちょっと, おい (人を呼んだり注意を引いたりする)
ta, ta, ta	へえ, ふうん, もういいよ (疑惑・不信・いらだち)
taratata	うん, へえ (疑惑・不信・軽蔑)
turlututu [tyr-ly-ty-ty]	ふん, よせやい, ばかな (軽蔑・不信・拒否など)
youp [jup]	よっ, うっ (歓喜・活気・いらだち)
zézayer [ze-zɛ[e]-je] = zozoter	歯音 [シュー音] 不全の発音をする
zou	((南仏)) さあ, それっ, 早く

これらの多くは間投詞とされる。しかしフランス語の擬声語として特筆すべきは動物の鳴き声であろう。

#### 4. 1. 2. 1. 動物の鳴き方

日本語では、動物は一般に「鳴く」と言い、細かい鳴き声の違いは「ニャンニャン (鳴く)」「ワンワン (鳴く)」などの擬声語で表す。それに対し、フランス語では、miaou (ニャー), oua-oua (ワンワン) のような鳴き声を用いて faire miaou (ニャーする?) とするほかに、動詞として miauler (ニャーと鳴く), aboyer (ワンワン鳴く, 吠える) という語が形成されている(60)。

(60) 動物の鳴き方<sup>27</sup> (動物名 - 鳴き声, 動詞 (イタリック))

家畜・家禽・小動物

猫 chat - miaou, ronron, frr, *miauler* (ニャオと鳴く),  
*ronronner* (ゴロゴロ鳴く), *feuler* (うなる)

犬 chien - (w)oua(h) - (w)oua(h), ai ai, aou, *aboyer* (吠える),  
*clatir*, *grogner* (うなる), *japper* (キャンキャン鳴く),  
*clabauder* (吠え立てる), *hurler* [オオカミより細かい]

オオカミ loup - hou hou, *hurler* ※ [犬ほど細分していない。]

ウサギ lapin, lièvre - crr-crr, crunch, *clapir*, *couiner* (lièvre) *vagir*

ウマ cheval - hi *hennir* (いななく), *s'ébrouer*

ロバ âne - hi-han [i-ã], *braire*

ウシ vache, taureau - meuh, beuh, *meugler*, *beugler*, (taureau) *mugir*

ブタ cochon, porc - coui coui, groin-groin, grouic, *grogner*

ヒツジ bélier, mouton, brebis

- bêêê, bé, mé (bélier) *blatérer*, (brebis, mouton)  
*bêler*

ヤギ chèvre - bé, mé *bêler*, *bégueter*

ラクダ chameau - brouuu *blatérer*

シカ cerf - (cerf) *bramer*, *braire*, *réer*, *roter*. (biche, le chevreuil,  
le daim) *bramer*. (faon) *râler*

キツネ renard - *glapir*

イノシシ sanglier - groin-groin *grommeler*

ネズミ souris - couic, crr-crr, crunch *chicoter*

猛獣

ゾウ éléphant - brrroa *baréter*, *barrir*

ライオン lion - grr, meuh *rugir*

<sup>27</sup> 主に以下の文献を参考に作成した。Delas & Delas-Demon (1979), p. 165, Hamon (1992) pp. 102-106, 松原 (1996 < 1974) pp. 356-357, P Roy, Roy, GR. 鳴き声は主に Enckelle & Rézeau (2003), pp. 40-53による。ただし、鳴き声そのまま動詞化されたものだけではない。

トラ tigre	- <i>feuler, râler, rauquer</i>
ワニ crocodile	- <i>lamenter</i> <sup>28</sup>
クマ ours	- <i>hou hou gronder, grogner, hurler</i>
鳥類	
鶏 coq, poulet, poule	- <i>coquerico, cocorico, cot cot cot, cui-cui, piou piou (poule) glousser, caquetter, (coq, poulet) chanter, coqueriquer, (poussin) piauler, pépier, piailler.</i>
スズメ moineau	- <i>couic, cuic, cuicui pépier</i>
ヒバリ alouette	- <i>tireli grisoller, tirelirer, turluter, chanter</i>
ウグイス rossignol	- <i>tireli gringotter, chanter</i>
小鳥 petits oiseaux	- <i>gazouiller, chanter, pépier</i>
ツバメ hirondelle	- <i>cui-cui gazouiller, trisser</i>
ウズラ caille	- <i>cat-caillou carcailler, margotter, cacaber, courailler, pituiter</i>
ヤマウズラ, イワシャコ perdrix	- <i>cot cot cot, cacaler, cacaber</i>
ツグミ merle	- <i>babiller, siffler</i>
ハト pigeon, colombe, モリバト ramier, キジバト tourterelle	- <i>coucourou, crou-crou, glou glou, rou rou roucouler, pépier, gémir</i>
カモ canard	- <i>nasiller, cancaner</i> (「悪口を言う」の意味もある)
アヒル canard <sup>29</sup>	- <i>coin-coin cancaner</i>
ガチョウ oie, jars	- <i>coin-coin (oie) brailler, siffler, cacarder, criailler, (jars) jargonner.</i> (言葉遊び <sup>30</sup> )

<sup>28</sup> ワニはlamenter「嘆く」という。これはワニの目が涙を流して泣いているように見えることにかけて言葉遊びからできた表現だと思われる。そこからlarmes de crocodile (直訳「ワニの涙」)「そら涙」という表現もある。

<sup>29</sup> 幼児語で、canardのことをcancanと言う。

<sup>30</sup> メスのガチョウjarsが鳴くのをjargonner「隠語jargonを使う、ブツブツ言う」と言うのは、音の類似にかけて言葉遊びからできた表現だと思われる。

- オウム *perroquet* - *prrr prrr jaser, parler, siffler*  
カラス *corbeau* (総称), *corneille* (小型)  
- *coua, couac, croa (corbeau) croasser, (corneille) crailler*  
カササギ *pie* - *cacacacaca jacasser, jaser, babiller*  
キジ *faisan* - *cot cot criailler* (「わめき散らす」の意味も)  
七面鳥 *dindon* - *glou glou, pia-pia glouglouter*  
ホロホロ鳥 *pintade* - *criailler*  
クジャク *paon* - *léon criailler, brailler*  
ヤマシギ *bécasse* - *crouler*  
カケス *geai* - *cajoler, jaser*  
フクロウ *hibou*, ミミズク *chouette*, モリフクロウ *hulotte*  
- *hou hou, chou chou (chouette), bou bou (hibou) (hibou) huer, (h)ululer, (chouette) huer, (h)ululer, chuintier, (hulotte) hôler*  
カッコウ *coucou* - *coucou, hou hou coucouler*  
アトリ *pinson* - *ramager*  
コウノトリ *cigogne*  
- *clacla craquetter, glottorer, craquer*  
ツル *grue* - *trompeter* (< *trompette* トランペット)  
ハクチョウ *cygnet* - *siffler, trompeter*  
ワシ *aigle* - *glatir, trompeter*  
その他  
カエル *grenouille*, ヒキガエル *crapaud*  
- *brek brek, coa/coac/croa, corex/corex, crr-crr, grr, kékéké coasser*  
ヘビ *serpent* - *bzz siffler*  
ハチ *abeille*, マルハナバチ *bourdon*, ハエ *mouche*  
*bzz, dzz, zonzon, zzz bourdonner*

セミ cigale	- cricri, zzz <i>chanter, craquer, craqueter, striduler</i>
コオロギ grillon	- cricri <i>grésiller, grésillonner</i> (ジユウジユウいう)
クジラ baleine	- baunnn

このように、フランス語では動詞化された鳴き声のオノマトペが細かく作られていることが特徴と言える。

一方、日本語では、「鳴く」以外の動詞を用いるのは、「(犬, 猛獣が) 吠える」, 「(馬が) いななく」, 「(小鳥が) さえずる」「うなる」などいくつかに限られる<sup>31</sup>。代わりに、「ニャーニャー (と) 鳴く」というように、オノマトペに「鳴く」をつけた表現は種類が多い。またある程度自由に創作できる。

フランス語でも « faire miaou » というように動詞 faire を用いて表わされる。上に見るように、miaou, ronron などの鳴き声の種類は意外に多い。また, Enckelle & Rézeau (2003) によれば、小説などにおいて比較的自由に創作も行われている (例えば, カエルやカササギの鳴き声)。

また、ウマとロバ、ヒツジとヤギ、アヒルとガチョウなど、日本語では違いをほとんど表現しないものでも、フランス語では異なる鳴き声や動詞が用いられる。とくに鳥については、フランス語は多様な動詞を作っている。

鳥については、日本語に「聞きなし」というのがある。これは「法華経」(ウグイス), 「てっぺんかけたか」(ホトトギス) というように、鳴き声を意味のある言葉になぞらえて表す。そのほかにも、「阿呆, 阿呆」(カラス), 「仏法僧」(コノハズク), 「ぼろ着て奉公」(フクロウ), 「土食って虫食って渋い」(ツバメ), 「一筆啓上仕 (つかまつり) 候」(ホオジロ), 「特許許可局」(ホトトギス) (朝日新聞2007年5月27日付「天声人語」) などがある。このように一種類に特定化された鳴き声が、限られた一部の鳥にみられる。フランス語ではこのような限定度の高い鳴き声の動詞もあるが、いくつかの鳥に共通に用いられる動詞も多い。

<sup>31</sup> やや特殊な例では「クイナがたたく」「鶏が時を作る」「ウグイスが経を読む」「ホトトギスが名告(なの)る」などがある(金田一, 1988, p. 178)。日本語の動物名では鳥が豊富な名前を持つ (cf. 1. 4. 4)。

他方、フランス語は虫の声に全く無関心である<sup>32</sup>。一応、鳴き声を表す動詞が作られているが、「(コオロギが) 鳴く」を意味する *grésiller* は「じゅうじゅう、ざあざあ」という音の動詞を借用しているもので、コオロギ独自のものではない。

それに対し、日本語では、リリリリ (コオロギ)、リーンリーン (松虫)、チンチロリン (鈴虫)、スイッチョン (馬追い)、ミーンミーン (ミンミンゼミ)、ジージー (アブラゼミ)、カナカナ (ヒグラシ)、ツクツクポーシ・オーシーツクツク (ツクツクボウシ) というように、さまざまな虫やセミの名称と鳴き声を区別する。

このように、種によってそれぞれの言語で得意、不得意分野があるので、一概には言えないが、動物名称と同様、鳴き声についてフランス語が多様な語彙を持っていることは明らかである。

## 4.2. 擬態語

擬態語はフランス語にはない (金田一1988)、またはほとんどないことが指摘されている (cf. 1.4.1)。

田島 (1973) は、フランス語は擬態語になるともうお手上げだといい、日本語の擬態語を翻訳するときには、「けろりと忘れる」を *oublier complètement* (完全に)、「ぐうぐう眠る」*dormir profondément* (深く)、「ゆらゆら揺れる」*se balancer lentement* (ゆっくり)、「すくすく育つ」*grandir rapidement* (急速に)、「するする登る」*grimper rapidement*、「ひらりと」も「ふわふわ」も *légèrement* (軽く) とする以外に方法がなく、擬態語については日本語のイメージがフランス語にはほとんど全く移しえないといわざるをえないと言っている (同上)。

それでも、わずかに *pêle-mêle* 「ごちゃごちゃ (に)」, *méli-mélo* 「まぜこぜ」, *cahin-caha* 「どうにかこうにか」, *flafla* 「見せびらかし」などを擬態語表現の可

<sup>32</sup> ただしPRoyには次の項目がある。「cri-cri, cricri /kri-kri/<擬音> [男] (コオロギ・セミなどの) 鳴き声 ② ((話) コオロギ) この辞典を検索した限りでは、虫の声の擬音 (擬声) 語はこの項目しか見つからなかった。コオロギもセミも同じ鳴き声なのは興味深い。

能性ありとしている。

一方、田辺（1969）（1997, pp. 164-166）は、上のような反復形式や副詞的な表現にこだわらず、porc-épic（やまあらし）やpapillon（蝶）などの名詞をフランス語の擬態語として紹介している。すなわち、porc-épicはk音が二つならぶと痛いとげとげが如実に感じられ、papillonは、ラテン語papilio（パタパタとなびくのぼり）から作られた語で、二枚の羽の動きが感じられる。

ラテン語papilio自体が擬音語であり、一方でフランス語のpavillon「旗・のぼり → 展示館」となった。このように擬音語や擬声語から擬態語ができることがある。例えば日本語の「ごろごろ（と音を立てて転がる）」は「(家で) ごろごろする」となると擬態語になる（cf. 1.3.1）。

このような擬音〔声〕語から擬態語への移行の可能性があるものは少なくない。（以下の訳や説明は主にPRoy, Roy, CR, GRによる。）

(6) 音から様態へ移行したと考えられるもの

blabla<sup>33</sup> 「ぺちゃくちゃ」から「おしゃべり」。faire blabla  
おしゃべりする。

charivari (m) 騒がしい物音、喧騒（けんそう）；（金切り声をあげての）大騒ぎ。てんやわんや。

C'est quoi ce charivari ? Oh non, le carnage !

（一体どうしたんだ？ めちゃくちゃじゃないか！）<sup>34</sup>

couac [kwak] (m) 「調子はずれの音」から「不一致，不調和」。

guili(-)guili [giligili] (m)

（くすぐる時の）こちょこちょ（擬声語）。

faire guili-guili à qn（人）にこちょこちょする，くすぐる。

<sup>33</sup> ラテン語 barbarus, ギリシア語 barbaros に由来する。（Marouzeau, 1963, *Aspects du français*, p. 140）

<sup>34</sup> B. Mouttapa他, 漫画「Le petit PARIS」『NHKラジオフランス語講座』2003年2月, p. 83. より。絵は、大騒ぎの直後の散らかった部屋。

- pioupiou (m) (やや古い話語) 若い兵士; 兵卒, 兵隊。<sup>35</sup>
- tagada 短く繰り返す音を示すオノマトペ。とくに馬の駆け足の音。そこから, あっという間に過ぎ去る様子を表す。  
Le mois d'août, *tagada-tagada*, s'achève.  
(8月は馬の駆け足のようにあっという間に終わる。)
- tintin [tɛ̃tɛ̃] (m) グラスの触れ合う音から, 「何もないこと」  
*faire tintin* なんにもない [なくなる], からっけつである。
- toc [tok] (m) こつこつ [ばん, ぼん] という音から, 偽物, 模造品; 下らない物。  
*C'est du toc!* そいつは偽物だ。 *en toc* まがいの。  
(形容詞) 偽の, つまらない; 滑稽な。気の変な, ばかな。
- tralala (m) 不信・喜びの間投詞から, 「派手, 華美; 気取り」の意味で。(cf. § 4.3.)  
*se marier en grand tralala* 派手な結婚式をあげる。  
*et tout le tralala* その他いろいろと。  
(形容詞) *un dîner assez tralala* 派手な夕食会
- tsoin-tsoin, tsouin-tsouin (間投詞) (俗語) ちゃんちゃん [歌の区切りに入れる楽器による合いの手)
- [tswɛ̃tswɛ̃] (形容詞) (俗語) 念入りな, よくできた。
- zinzin [zɛ̃zɛ̃] (m) 騒々しいもの (エンジンなど) から, (形容詞) 頭が少し変な。

<sup>35</sup> 小鳥の鳴き声から若い未熟な状態を意味するようになったと考えられる。

また Enckelle & Rézeau (2003, pp. 82-83) は、音が抽象化された表現として次のような例を挙げている。

(62) 突然の消滅 (disparition soudaine) → fit, pcht, pff, pft, piouf, vrip.

速さ、突然性 (rapidité ou soudaineté d'un procès) → badaboum, boum, clac, clinc, cloc, crac, cric crac, flop, hop, paf, pan, pif paf, piaf, ploc, plof, plop, pof, pouf, poum, prr, ran, schlac, schlaf, tac, tchac, tchiac, toc, vlam, vlan, vrtr, wham, zip, zoum, zoup, djinn, fchiaff, froumm, zioupe, zit.

反撃 (riposte) → tac, toc.

これらの多くは擬音〔声〕語としても用いられており、破裂音 [p] と、[s] [ʃ] [f] などの摩擦音を含むものが多いのは、瞬発的で急激な変化の様子と風を切る音などとの類推があるのかもしれない。しかし、音と意味との間に擬音語ほどの直接的な関係は感じられず、ここにはあきらかに擬態語としての特徴が見られる。

また、やや古いが、速さを表すものとして次のような小説の例も挙げている。

(63) « [...] il l'a menée d'un train! zig et zig et zag!... » (Willy, *Lettres de l'ouvreuse*, 1889, p. 72) (同上, p. 83)

(彼はそれを一気に運んだ! さっさっさっと!)

しかし、中には音まねからではなく「音を立てないものを音のように象徴的に表す言葉」と思われるものもないわけではない。これはすなわち本来の擬態語の定義に当てはまると思われる。

(64) 擬音語からの移行ではないと思われるもの

(反復形を用いるもの)

cahin-caha [kaẽkaa] (副詞) どうかかこうにか Arriver *cahin-caha*.

= clopin-clopant えっちらおっちら

= balin-balan (地方語)

chouchou,-te [ʃuʃu,-ʃut]

〔名〕お気に入り, 秘蔵っ子。<sup>36</sup>

<sup>36</sup> chou (キャベツ, かわいい人) から形成された (GR)。chouette (素敵) などにも共通の音の感覚があるかもしれない。

- chouchouter [ʃuʃu-te] 〔他動〕…を甘やかす, ちやほやすする
- chouchoutage (m) chouchouterの名詞。
- cracra 垢だらけの。<sup>37</sup>
- flafla (m) 見せびらかし Faire du *fla-fla*. En voilà des *fla-flas*!
- fric-frac [frik-frac] (m) (古い) 押し込み強盗
- gnangnan (形容詞) ぐちっぼい, 軟弱な; [物語など] お涙ちょうだいの。  
(名詞) ぐちっぼい人, 軟弱な人。
- méli-mélo (m) まぜこぜ<sup>38</sup>。
- pêle-mêle (m) ごちゃまぜのもの。(副詞) ごちゃごちゃ (に), 乱雑に, 雑然と。  
entasser des livres pêle-mêle 本を乱雑に積み上げる  
Dans cette maison, tout est pêle-mêle.  
Jeter, semer des objets pêle-mêle.
- ric-rac [rik-rak] (副詞句) きっちり, ぴったり; ぎりぎり。  
payer ric-rac sa note d'hotel ホテルの勘定をきっちり払う
- tohu-bohu [toyboy] (m) (天地創造以前の) 混沌, 大騒動, 大混乱; 喧騒<sup>39</sup>。  
(反復形を用いないもの)
- bataclan (m) 雑多なもの, ごたごた。 et tout le bataclan その他もろもろ。

<sup>37</sup> crasseux (垢だらけの) から形成された (GR)。crade (非常に汚い) などもあり, cra- に不潔の音象徴があるらしい。

<sup>38</sup> pêle-mêle とともに, 動詞 mêler (混ぜる) から形成されている。

<sup>39</sup> ヘブライ語起源。

- chochette (f) (俗語) 淑女ぶった〔気取った〕女, かまとと (間投詞的に用いる)。  
(形容詞) きざな, 気取った。
- nanan (m) (話語) 砂糖菓子, 甘いもの。  
C'est du nanan. それはとてもすてきだ〔おいしい, たやすい〕。
- perlimpinpin [pɛr-lɛ̃-pɛ̃-pɛ̃] (m)  
いかさま, いんちき。絵空事。  
poudre de perlimpinpin いんちき薬。

これでもやはり, フランス語の擬態語は日本語とは比べものにならないくらい少ない。

しかし井上ひさし (1990, pp. 217-218) は言う。

問題は擬態語です。「日本語には圧倒的にこの擬態語が多い」というのが定説になっていますが, 筆者は (不遜にも) この定説を半分ぐらい疑っています。たとえば英語, なんらかの激しい動きを含む動詞がみんなみごとに -ash という音を持っているのはなぜでしょう。(clash, crash, dash, flash …)。また, sli- ではじまる言葉が, 意味になめらかさを隠しているのはなぜでしょう。(slide, slip, slick, slime, slither …)。ほかに, gl- (連続的な光。glance, glare, glaze…), str- (細長い形。straight, street, stream …) など, たくさんあります。-ash, sli-, gl-, str-…, みんな, 音によってある意味を象徴的に表そうとしたのではないのでしょうか。とすると英語にも擬態語が多いのではないか。日本語の擬態語は, 二拍の語根を重ねるものが多く (こそそ, ぴかぴか, きらきら), 形態的にはっきりしているから目につきやすい。しかし, たとえば英語では, それが形態的に顕著ではない。そこでなかなか気づきにくい。「びっくりした」のビックリは擬態語です。けれども大部分の日本人は, これを擬態語と意識していない。これと似た事情が外国語にもあって, 擬態語であることが隠れてしまっているのではない

か。

井上の発言は英語についてのものだが、同様の観点から、泉（2004, p. 85）もフランス語について述べている。

動詞では、ふらつく、きらめく、ぎらつく、はためくなどがオノマトペを元にして派生されたものだが、もう元が分からないまでになっているものもある。ささやく、とどろく、ひかる（ぴかぴかと関係あり）、おどろく、ゆれる、などだ。しかし、こうした動詞までをオノマトペとはふつう考えない。音象徴（sound symbolism）という類のものに入るか、あるいは、もはやふつうの語と考えられているのである。もし、こうしたところまで範囲を広げるなら、フランス語にも擬声語はもちろん、擬態語はたくさんあることになる。chuchoter「ささやく」、grincer「きしむ」、rouler「転がる」、briller「輝く」、étinceler「きらめく」など、みなそうである。

この観点に立って擬態語の定義を拡大すれば、次のような動詞や形容詞（名詞）も擬態語のリストに入れられるかもしれない<sup>40</sup>。

(65) éblouir 目をくらませる — éblouissant (形) まぶしい

blanc (名・形) 白 (い)

blond (名・形) 金髪 (の)

lisser なめらかにする — lisse (形) なめらかな

glisser 滑る — glissant (形) 滑りやすい

<sup>40</sup> これらの例は直感的なものであり、厳密な検証はできていない。横に並べた形容詞や名詞は、動詞と同語源で、音象徴の証明にはならない。むしろ語源的に無関係だと思われる語同士で、音と意味の対応が見られるものが重要である。その可能性のあるものを縦にくっつか並べた。

また、語頭の音だけが問題になるとは限らない。接頭辞などは外して考えた方がいい場合がある。éblouirやéclairerなどのé-

frôler かすめる (> frou-frou)  
 froisser 皺くちやにする (> frou-frou)  
 friper 皺くちやにする  
 froncer 皺を寄せる

éclairer 明るくする, clarifier はっきりさせる — clair (形) 明るい  
 cligner 目くばせ・まばたきする  
 — clin (d'œil)(名) 目くばせ・まばたき, clinquant (形) 金ぴかの

しかしここで注意しなければならないのは音象徴とオノマトベとの境界線だろう。この点は擬情語についてはさらに問題となる。

#### 4.3. 擬情語

擬態語のうち、「人間の心の状態を表すようなもの」(金田一, 同上, p. 8)である擬情語はフランス語にはあるのだろうか。上述の Enckelle & Rézeau (同上)は、音が抽象化された表現の中に、次のものを挙げている。

- (66) 痛み (douleur) → aïe, hou, ouille.  
 攻撃性 (agressivité) → grr, kss kss  
 無関心 (indifférence) → brr, ffi, fit, pcht, pff, pft, prrt.

これらのいくつかは、すでに「擬声語」として辞書から採録して挙げておいたが、その説明には、つぎのように心理・感情の意味の記述が見られるものがある(主に PRoy)。

- (67) aïe 《繰り返して》ちえっ, いやはや, やれやれ  
 ouïe, ouille うっ, いてて; うへえ, うひゃあ (痛み・驚き・不満)  
 hé 《驚き》おや, まあ,  
 《強調》Hé! Hé! ええ, おやおや (賛同・皮肉・あざけり・ためらい)

peuh	ふん, へっ, ふうん, へえ (軽蔑・無関心など)
ta, ta, ta	へえ, ふうん, もういいよ (疑惑・不信・いらだち)
taratata	うん, へえ (疑惑・不信・軽蔑)
turlututu [tyr-ly-ty-ty]	ふん, よせやい, ばかな (軽蔑・不信・拒否など)
youp [jup]	よっ, うっ (歓喜・活気・いらだち)

Enckelle & Rézeau にも次のような解説が見られる。

(68) grr 人の苛立ちや攻撃性を示す。  
Ah! celui-là ! *grrr!* (p. 246)

kss kss 人を別の人にけしかけるために用いる。  
= *acz acz, css css, ex ex, cz cz, kci kci, kis kis, ksi ksi, x x, xi xi, xie xie, zi zi* など。  
Excite-moi donc encore! *ksss! ksss!* (p. 272)

brr 無関心, 拒否, 軽蔑を示すために用いる。  
*sa fille gonfla ses joues en tirant la langue et souffla : Brrr!* (p. 133)  
その他「恐怖」という記述も見られる (PRoy)。

pcht 拒否, 無関心を示す。  
*Les règles du sport? Pchitt... ce n'était pas une barrière.* (p. 322)

pff 無関心, いい加減さ, 軽蔑, 倦怠感, 無力感の標識となる。  
= *pfeu, pfeuh, pfhou, pfo, pfou, pfouh, pfu, pfuh, pfui.*  
*Liliane fait un pfhou des deux joues, (...), de manière superfétatoire (...).* (どうでもいいように)  
*Le gendarme!... pffff!... dit dédaigneusement Fifi.* (軽蔑するように)。(p. 324-325)

pff (t) [pf (-t)], pfut [pftyt]

ふん, へっ (軽蔑・無関心) (PRoy)。

これらの語は、「痛み」の語をはじめ、言語表現というよりも実際の発声音に近い印象を受けるものも多い。そのため、綴り方にヴァリエーションが多い。用例を見ても引用形式が多く、感情とともに発する声を書写した間投詞の性格が強い。音を写しただけなら、擬声語との区別が明確ではない。日本語の擬情語とは使い方がだいぶ異なっている。

「活字化できる音声連続および発音できる文字によって対象の様子を表現したもので、一定の形と意味をもち、一定のグループの人々の間で抽象的・普遍的に通用する」(飛田他)という定義からすると、果たしてこれらがオノマトベとくに擬態語(擬情語)と言えるかどうかさえ問題になるかもしれない。しかし、音と意味の間に明確な必然性が見られず、一見、音を表すように見える語が、人間の感情を意味するという点では、擬情語とみなす可能性もないわけではない。とくに最後の例の« faire un pffhou »のように言語表現らしい形式も見られるものもある。

以上のような微妙な例ではなく、オノマトベらしい表現形式をもち、文の中に組み込まれて用いられるという点で、日本語の擬情語により近いと言える例を2点挙げる。

(69) *tralala*

既に擬態語でみたように、PRoyは「不信・喜びを表す擬音語(間投詞)」としている。(cf. § 4.2.) 「派手・華美」のもつよい面と悪い面、「楽しさ」「気取り」「嘘っぽさ」、そこから「喜び」「不信」の心理が生じると考えられる。その意味で、次の例も擬態語(外面)と擬情語(内面)の両面の意味を持つと言える。

*se marier en grand tralala* 盛大に(嬉々として)式を挙げる  
*et tout le tralala* その他もろもろの(関心が湧かない)もの  
*un dîner assez tralala, où il y avait un ou deux ministres, un peintre, un milliardaire, une altesse et des femmes à la mode* (GR) 大臣, 画家, 軍人, 王族, 今風の女性達のいた, かなり派手な(俗物的な, 立派な)

夕食

(70) *flagada*

= *flagada*とも綴る。「力がない、疲れた」「悲しい」という心理状態を表す。

*Se sentir flagada, complètement flagada.*

数の一致がある。

*Je suis complètement flagada. Ils sont complètement flagadas.*

一致しないこともある。« *des airs flagada* »

*flasque* (たるんだ、無気力な)と語源的な関係がある (GR)。

*flagada*の綴りは、*fragile*との類推かもしれない<sup>41</sup>。

残念ながら、このような例は今のところほとんど見つけられない。

## 5. まとめ

本論の前半において、日本語のオノマトペの主な特性を概観した後、日本語に特徴的だと言われる擬態語の中でもとくに擬情語について、その用法から他の擬態語とは異なる特徴があることを指摘した。すなわち擬情語については、具体的な動詞よりも「する」「だ」などの(補)助動詞とともに用いられることが多い。これは擬情語が動詞化しにくい意味を表すためだと考えられる。

一方、フランス語については、日本語の持つ種々のオノマトペに対応するものがあるのかを問題とした。従来、擬音語・擬声語の豊富さについては指摘されているが、擬態語の存在についてはほとんど認められていなかった。

充実したオノマトペの体系をもつ日本語と、ほとんど擬音語・擬声語のみに集中するフランス語とでは、対等の比較・対照することはもとより不可能であり、本論ではむしろ日本語からフランス語を見ることによって、フランス語に日本語と同様のオノマトペの体系(特に擬態語)があるのかを検証する形をとっ

<sup>41</sup> この語に関する解説は主にGRによる。*flagada*の綴りはFrance Dhorneさんからのご教示による。ネット上に一例見られた。*fragile*との類推については著者の個人的意見。

た。

結果として、擬音語もさることながら、擬声語とくに動物の鳴き声の豊富さが確認された。それはまた鳴き声を表す動詞の豊富さに支えられていることがわかる。また擬態語の数はやはり圧倒的に少ないということになろうが、それでも意外にあるということがわかったのではないだろうか。日本語でも確認されるように、擬音語は抽象化して擬態語になる可能性があり、外見の様子を表す擬態語があれば、それが内面の心理状態を描写する擬情語へと移行することは十分あり得る。

しかし日本語と同様の形式を求めている限りでは擬態語、とくに擬情語の数は増えない。ここで問題になるのは、動詞形やさまざまな形式のものをオノマトペととらえることはできないかということと、オノマトペと音象徴の境界線である。この点を考えることがフランス語オノマトペの今後の課題となるだろう。

【参考文献】

- Crystal, David. (1987. 1st ed.) (1997. 2nd ed.) *The Cambridge Encyclopedia of Language*. London : Cambridge U. P.  
→クリスタル, D. (1992) 『言語学百科事典』大修館書店
- Hamon, A. (1992) *Les mots du français*. Paris : Hachette.
- Ishino, K. (2006) « Sur les expressions onomatopéiques de l'émotion en japonais. » *Cognition et émotion dans le langage* (慶應大学COEプロジェクト・シンポジウム「心と感情の言語表現」報告書) 慶應出版 (Tokyo : Keio University), pp. 105-115.
- 秋田喜美 (2017) 「外国語にもオノマトベはあるの?」『オノマトベの謎 — ピカチュウからモフモフまで』(窪蘭晴夫編) pp. 65-84
- 石野好一 (2006) 「日本語のオノマトベ, 特に擬情語について」(発表ハンドアウト) フランス語談話会2006年3月4日, 於慶應大学
- 石野好一 (2014) 「フランス語を知る, ことばを考える — 語彙の諸相 —」『ことばの世界』(愛知県立大学高等言語教育研究所年報, 第6号, 2014年3月, pp. 41-69.
- 泉邦寿 (1975) 「続フランス語そぞろ歩き3」『ふらんす』1975年6月
- 泉邦寿 (1976) 「擬声語・擬態語の特質」『日本語の語彙と表現 (日本語講座4)』(鈴木孝夫編, 筑摩書房) pp. 105-151.
- 泉邦寿 (1978) 『フランス語を考える20章 — 意味の世界』白水社
- 泉邦寿 (2004) 『フラン語の小径 — 楽しい意味世界への誘い』白水社
- 泉邦寿 (2017) 「日本語オノマトベの「意味」に関するノート」『日本エドワード・サピア協会研究年報』第31号, pp.45-56.
- 井上ひさし (1990) → 大野晋, 井上ひさし他 (1990)
- 大野晋 (2002) 『日本語の水脈 — 日本語の年輪 (第2部)』新潮社
- 大野晋他 (1989) 『日本語相談一』朝日新聞社
- 大野晋, 井上ひさし他 (1990) 『日本語相談二』朝日新聞社
- 大野晋他 (1990) 『日本語相談三』(朝日新聞社, 1990年)
- 金川欣二 (2007) 『脳がほぐれる言語学 — 発想の極意』筑摩書房
- 北原保雄「日本語の特質」『言語』1982年7月。pp. 38-45.
- 金田一春彦 (1957) 『日本語』岩波書店
- 金田一春彦 (1966, 1973) 『ことばの歳時記』新潮社 (文庫)
- 金田一春彦 (1978) 「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』(浅野編) pp. 3-

25.

- 金田一春彦 (1988) 『日本語 新版 (上・下)』 岩波書店
- 金田一春彦 (2001) 『ホンモノの日本語を話していますか?』 角川書店
- 窪蘭晴夫編 (2017) 『オノマトベの謎—ピカチュウからモフモフまで』 岩波書店
- 小池清治 (1994) 『日本語はどんな言語か』 筑摩書房
- 小池清治 (2003) 『日本語は悪魔の言語か?』 角川書店
- 小林英夫 (1965) 「擬音語と擬容語」『小林英夫著作集5』(みすず書房, 1976年), pp. 318-340.
- 佐久間治 (1996) 『英語の不思議再発見』 筑摩書房
- 須藤佳子他 (2015) 「フランス語談話会報告 有契性が恣意性か—オノマトベと象徴」『フランス語学研究49』(日本フランス語学会) pp. 162-167
- 田島宏 (1973) 「ことばのイメージ (2) 擬音語・擬態語」『NHKラジオフランス語入門』1973年5月, p. 79
- 田辺保 (1969) 『フランス語のこころ』 至誠堂 → (1997) 『フランス語はどんな言葉か』 講談社 (学術文庫)
- 中村明 (2000) 『日本語案内』 筑摩書房
- 野間秀樹 (1998) 「最もオノマトベが豊富な言語」『言語』1998年5月, pp. 30-34.
- 早田輝洋 (1987) 「擬音擬態語と言語の古層」『言語』(別冊)1987年06月 (16-7) pp. 102-103.
- バルバース, R., 上杉隼人訳 (2002) 『新ほんとうの英語がわかる—ネイティブに「こころ」を伝えたい』 新潮社
- 蛇蔵&海野凧子 (2012) 『日本人の知らない日本語3』メディアファクトリー
- 山口仲美 (2002) 『犬は「びよ」と鳴いていた—日本語は擬音語・擬態語が面白い』 光文社
- 特集 (1986) 「擬音語・擬態語」『日本語学』1986年7月号 明治書院
- 特集 (1993) 「オノマトベ—擬音語・擬態語の活力を解明する」『言語』1993年06月 大修館書店
- 特集 (2001) 「楽しいオノマトベの世界—擬音語・擬態語の質感を味わう」『言語』2001年08月 大修館書店
- 新聞記事「おいしさを感じさせるオノマトベ」『朝日新聞』2015年2月28日付

(オノマトベ辞典)

浅野鶴子編 (1978) 『擬音語・擬態語辞典』 角川書店 (巻末索引項目 約1500語)

小野正弘編 (2007) 『擬音語・擬態語4500日本語オノマトベ辞典』 小学館 (見出し語4500語)

五味太郎 (2004) 『日本語擬態語辞典』 講談社 (見出し語約180語)

飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典』 東京堂出版 (約2200語収録 (見出し語1046語, 同族語・関連語含む))

山口仲美 (2015) 『擬音語・擬態語辞典』 講談社学術文庫 (約2000語)

= 山口仲美 (2003) 『暮らしのことは 擬音・擬態語辞典』 講談社

Enckelle et Rézeau. (2003). *Dictionnaire des onomatopées*. Paris : PUF.

Nodier, Charles. (1808, 1984). *Dictionnaire raisonné des onomatopées françaises*. Mauvezin : Trans-Europ-Repress.

(フランス語辞典略号)

CR : 『クラウン仏和辞典』 (三省堂, 2005)

GR : *Grand Robert de la langue française. Dictionnaire alphabétique de la langue française*. (2e ed.) (1985) Paul Robert / Alain Rey. (dir.) Paris : Le Robert.

PRoy : 『プチ・ロワイヤル仏和・和仏辞典』 (旺文社, 2003)

Roy : 『ロワイヤル仏和中辞典』 (旺文社, 2005)

TR : *Trésor de la langue française informatisé*. (2004). Paris : CNRS